

大阪華僑江蘇同郷会新年会に出席報告（心齋橋：中国料理「大成閣」にて） 見本重宏

1月13日、新年会が総領事館夏欣華僑担当室長(右写真中央)はじめ約80名が出席され、盛大に開催されました。旧知の許士超会長(右写真下)より案内を受け、交流を深める為に初めて参加しました。本年同郷会は設立45周年(1969年設立)を迎えるに当たり、許会長は日中国交回復以来非常に厳しい局面の中で、過去の活動を振り返ると共に、在日華僑として相互理解の促進を民間レベルでより一層活動を行う決意を述べられました。差別意識の強い日本で暮らす華僑華人の心情人生訓である「落地生根」、即ち「現地で同化融和して生きる」を理解すれば、約70万在日中国人の方々が、現在の日中関係悪化の狭間で、最も嘆き悲しんでいるのではないのでしょうか。多くの日本人中国人は平和共存と繁栄を望んでおり、出来る事から手を携えて日中友好交流の再構築に向け着実に進んで行くしかないと思います。

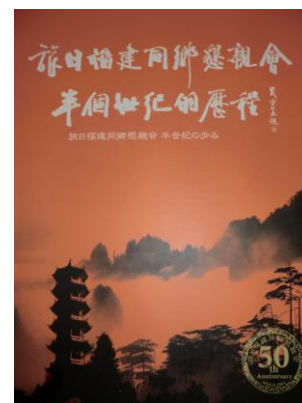


今回、来賓として相馬達雄(弁護士、1995年北京で法律事務所開設)氏に続き挨拶をさせて頂き、私が中国で生れた経緯や関西日中平和友好会の紹介と共に、在日中国諸団体との連携を深める必要性を述べました。また府日中友好協会大藪副理事長や神谷周三郎氏(厚生労働省中国残留孤児身元引受人)や愛甲外国語学院長等旧知の方々がたくさん出席されました。江蘇同郷会の益々のご発展を祈念すると共に当会の活動範囲がまだまだ不十分である事を改めて感じさせられた新年会でした。この様な機会を与えて頂いた事に許士超会長に感謝申し上げます。



更に、同じテーブルの劉中耀華僑總會副會長、胡士雲西日本新華僑華人聯合會會長、神戸華僑總會副會長、相馬達雄氏等来賓の方々と今後の日中交流活動について有意義な意見交換ができました。この時1月12日関西日中平和友好会新年会でも語りましたが、「政治には関与できないが各日中友好団体が意見交換や座談会等開催する事で、お互いの活動内容を理解し具体的協調性を図り、緩やかな連携(各団体の独自性を保持)を開始深める事が、日中間の厳しい局面に対応する「民を以って官を促す」具体的活動ではないか」と所見を述べさせていただきました。

また、昨年11月の「日中友好と交流の集い」に出席して頂いた劉中耀氏(華僑第4世：曾祖父が1889年長崎に来日)から昨年発行された「旅日福建同郷懇親会半世紀の歩み」(設立1961年)を頂きました。貴重な福建省華僑方々の苦闘の歴史を拝読させていただきます。



最後に、江蘇同郷会の益々のご発展を記念して、報告とさせていただきます。